

生活環境とメディア

花岡 尚之

要旨：生活環境とメディアの関係について、生活環境におけるメディアという視点とメディアとしての生活環境という視点がある。前者においてはインターネットやマルチメディア、ユビキタスなどの言葉で代表される最近のメディアが生活環境に与えている影響を検討することになる。後者ではメディアを情報媒体として広く捉えて、現代の生活環境が人に与える影響（情報）を考えることになる。生活環境は、2、3年ではあまり変化しないが、20、30年となると大きく変化する。デジタルメディアの発展で生活は便利な方向に進んでいる。しかし、メディアとしての生活環境は人々が交わり人を育てる生活環境でもあるので安定したものであるほうが安全であるが、最近の状況は変化が速く評価が定着するより早く次の変化が生じている。

1. はじめに

生活環境情報学科を平成 16 年 4 月に開設することになった。その名称は生活環境と情報技術が深く関わっていることを示唆するから、最近のメディアとの絡みでそれを述べよとの注文である。これまでの学部の教育としては、情報技術に明るい人材を情報社会に送り出したい、そしてそれらの人材は情報社会の諸相に通じていて、さまざまな問題解決にあたることができることとされていた。新しい学科の教育では、情報技術の専門科目を増やして情報技術だけで専門教育を構成できる教育内容にするとともに、情報社会科学部の「情報社会」のなかに含まれている環境というコンセプトを生活環境に光をあててより分かりやすいものとしている。その意味で、生活環境と情報技術の結びつきを意識的に強化したということはないが、生活環境の創出にかかるコーディネーションという点から、CAD (Computer Aided Design) の導入などデザインにおける情報教育を充実させている。また、資格取得に関わる実学的な科目を配置したので、科目の選択によっては、情報ネットワークに強いデザイナーをめざすことも可能である。

さて、生活環境とメディアの関係について、生活環境におけるメディアという視点とメディアとしての生活環境という視点がある。メディアの意味としては、マルチメディアが文字や図形、写真、音、映像などさまざまな情報を一つのデジタルのかたちで表現するメディアという意味

であるから、情報を伝える媒体ととらえてよい。さらに意味を広げれば、媒体ではなくても情報を伝えるもの、たとえば、生活の中にある神社とかその祭礼も伝統的な意味合いを伝えていることから見方によってはメディアといえるであろう。

生活環境におけるメディアとしては、インターネットやマルチメディア、ユビキタスなどの言葉で代表される最近のメディアが生活環境に与えている影響を検討することになる。メディアの重要性は、グーテンベルクによる金属活字を使用した印刷機の発明が 1456 年と歴史の上で大きく扱われていることから分かるように、情報の流れが社会生活に与える大きな影響は広く認識されている。ラジオの放送 (1925 年, 日本) やテレビの放送 (1953 年, 日本) もそれに劣らず、その普及が情報の流れを変え、生活を変え、社会を大衆的なものに変えてきた。いま、インターネットが普及し、携帯電話が普及して、ユビキタスコンピューティングが実現した。これらのデジタルなメディアによって生活環境はどのように影響されているのであろうか。

メディアとしての生活環境とは、メディアを情報媒体の一般化したものとして広く捉えて、現代の生活環境が人に与える影響を考えることになろう。上にのべた神社の例のように、生活環境を構成するさまざまなものが、情報を伝えている。人間の成長に影響を与えるものは遺伝か環境かという議論があるように、環境がメディアとしての性質を持っていることは広く認識されている。生活環境のメディアとして性質をバーチャルに再現する、保存する、改良する、創出する、などということができるかどうかかわからない。しかし、デジタルメディアが発達した社会において、メディアとしての生活環境が変質したことを指摘したい。そのあいだに直接の因果関係はないが、同じ時間の流れの中における変化であり、ともに社会の変化を表わしている。

2. 生活環境におけるメディア

生活環境にあらたに登場したメディアには、インターネットや携帯電話がある。これまでのラジオ、テレビとの違いは、双方向性¹⁾である。これまでも電話は双方向であったが、音声とファックスによる文書イメージだけの交換である。新しいメディアは、マルチメディアの双方向性がある。音声や文書イメージのほか、文字 (コード) や写真、映像を相互に送ることができる。電子メールのようにパーソナルな双方向性もあるが、ウェブサイト運営すれば公衆に開かれた双方向性と対等性¹⁾も実現できる。そしてそのコストは、蓄積する情報量にもよるが個人的な財力の範囲にある。この双方向性が本質的に生活環境を変化させるのだろうか。

メディアの進化とともに、双方向の通信の内容が変わっている。電話は、ファックスができて音声だけではなく図形を送ることができ、記録が残せるようになった。ビジネスではテレックスが廃れてファックスが主流が変わった。家庭でもファックスの機能は、手書き文書の送受信と記録性 (記録が残る) ということから、重宝がられている。インターネットのメール機能が登場して、情報交換の内容がさらに変化した。文書の交換では、文書の作成を文書作成ソフトウェアで行うことから、ファックスよりも文字コードを使う電子メールの方が、そのまま編集できて便利

である。さらに文字コードのほうが、ファイルが小さくて記録性（記録が安定している）もいい。インターネットへの接続では、通信料が固定費のほかにほかからない常時接続の新しいサービスが登場して、双方向の通信環境がおおきく変わった。この場合にコストが、通信の時間や情報量、距離によらないので、都市でも田舎でもおなじメディア環境を手にすることができる。これらの変化はあるが、生活環境において双方向性がおおきな意味を持つのは、会話を置き換えているチャットやメール以外のものでは、ウェブサイトの開設が拡大するときである。そのためには個人やグループの表現意欲が高まる必要があるが、いまのところ趣味的な利用の範囲にとどまっている。また、ある種の仕事は家庭においてできるようになることからオフィスに通勤する必要が少なくなって、家族とともにいる時間が増えるといわれた。そのような勤務形態が、個人的な業務委託（内職）では行われているが、拡大して社会現象とまでなっているという報道はない。いまのところ新しいメディアの双方向性が生活環境の変化として現れてきたとまではいえない。

地上波デジタルテレビ放送が2003年12月に始まり、アナログテレビは2011年には放送を終了して置き換わる予定である。高品質の画像と音声のほか、番組案内などの関連するデータ放送を参照することが出来る。また将来は、双方向性を利用して視聴者の番組参加も可能であるという。これまでテレビは、映像という感情に強く訴える特性から、ニュースなどの情報の提供メディアというよりも、娯楽媒体として受け取られている。そのために家庭では、家族のそれぞれがテレビに向かうために家族のつながりが薄められてしまいがちである。とくに親との接触と会話が必要な幼児に、テレビ（やビデオ）を長時間にわたって視聴させる現象すらみられるまでになっている。近所の環境が閉鎖的となって子供同士の接触が少なくなっていることとあいまって、健全な発達の上では大きな問題である。デジタルテレビの多チャンネル化によって娯楽性の高い番組がつねに視聴できる環境になり、いずれは携帯端末にも配信されて選択の多様性が高まると、すでに問題視されている家庭や社会のあり方に行き過ぎた変化が生じる可能性がある。家庭や地域において人と人との接触が希薄化する傾向を助長し、社会性を体験から学ぶ機会を減少させる可能性に不安を覚える。

会話を置き換えているチャットは、メディアがユビキタスな、場所を選ばない特徴を備えたことによって実現している。携帯電話によるインターネットサービス加入者は、6,577万人にも達している（総務省、2003年8月）。携帯電話を使った短いメールの交換によって、気づかれること無く会話が可能である。授業中でもお構いなく、隣を気にすることなく使っている。それが家庭の中でも行われるから、親にも知られたくない個人的な世界を容易に作り出すことができる。ユビキタスなメディアによって、ホームエレクトロニクスのモニターや制御がその気になればどこからでもできるようになっている。留守番電話の聞き取りやスイッチの入切、防犯警報の通知などが誰にでも可能である。携帯電話の瞠目すべき発展はとどまるところを知らない。マルチメディアの入出力ができて、送受信ができて、情報が蓄積できてという機能が揃っていることから、将来の可能性は非常に大きいことは間違いない。

インターネットが世界に開かれている、世界中の情報に接することができる、ということはす

ばらしい環境の変化である。2 バイトコードの開発で、世界の多くの言語の文字コード体系が造られている。したがって、多くの人々は自分の母国語でウェブサイトを作ることができ、その情報は地球上のどこからでも読むことができる。しかし、家庭の PC の画面に世界の情報を映し出すことができるということがすばらしいためには、言葉の障害がある。義務教育で学習している英語でも、よほど大きな動機付けがなければ読みこなすまでの実用性がでてこない。中国語、韓国語、タイ語、フランス語などが理解できれば、それを話す人々の生の声、生活感情に接することができる。生活環境に広がりができる、さまざまな場所に身を置いた考え方に接することができる場所である。航空機が時間距離による空間認識を歪ませたように、理解力のあるものにはインターネットが生活空間をその部分へ拡大する効果がある。

さらに新しいメディアとして非接触 IC チップをあげることができる。IC チップは、極小の 0.4mm 角まで小型化され、非接触で情報の出し入れができるもので、アンテナをつければ 30cm 程度はなれていても動作する。紙幣にも織り込むことができると報道されている。このチップを埋め込むことができれば、あらゆるものに情報をもたせて、それを利用することができる。最近開かれた福祉機器展では、交差点の情報を記録した IC チップを点字ブロックに埋め込んで白杖で聞き取る試みや、触っただけでは中味が分からない缶詰や冷凍パックに IC チップで情報をつけておいて使用するときに器具で再生あるいは読み上げて適切なものを調理に使う例が紹介されていた。目の不自由なひとには音声に変換されることは朗報である。非接触 IC チップが電源を使用せずに情報を保持することから、このような用途が開かれた。美術館にガイドシステムとして、ヘッドセットに無線で解説を送るものがある。同じように、街角において IC チップから道案内を読み取る、商店において商品の説明を聞き取るなどの利用が考えられるであろう。

高齢者福祉に新しいメディアを活用する例も多い。直接対人援助に情報技術を使うことは、福祉情報技術のおもなテーマである。生活環境の一部として情報技術を取り込んで、在宅介護に役立てることも考えられている。一人暮らしの老人が死後何日もしてから発見されるニュースは不憫である。それを防ぐために、室内の移動や器具の使用などを情報として生存を確認するアイデアが出されている。インターネットを介して遠隔地から、老人の同居者であるかのように訪問者に対応して、防犯や後見的な処理にあたることも考えられる。老人は一般的には情報弱者というが、デジタル技術を使うのに向いていない。しかし、最近の音声認識やパターン認識の技術で、インターフェースを音声や表情を使った人間的なやり取りに近づけることに期待がもてる。

教育問題として、少年らがゲームやビデオにのめり込んで現実から遠ざかってしまい、仮想的な現実に入り込んでしまうことが議論されたことがある。インターネットが作り出す情報空間にも、有益な情報とともに、カルト集団の誘い、自殺の誘い、金儲けの誘い、性的な誘いなど危険な情報が待ち受けている。知情意というが、少年の教育には知性を磨き、情操を養い、意志を堅固にする修練が必要であるということは、伝統的に認められているところである。しかるに、少年らの生活環境に無批判に入り込んでくるメディアは、多くの時間を奪い、極めてパーソナルに誰にも悟られること無く影響力を行使する。その結果が表れるのは思春期以降になる。そのとき

に是正することは容易ではない。因果的な議論は少ないが、家族や遊び仲間の中で成長し、社会性を身につけ、知情意の調和がとれた発達をするべき少年が、メディアに没頭することによって失うものが大きいと考えられる。

3. メディアとしての生活環境

メディアとしての生活環境とは、生活環境が情報を伝える機能をもっていることに注目した言い方である。生活環境というとき、そこには生活の容れ物としての環境、いわばハードウェアとしての環境と、家庭や学校、地域社会を構成する人びとからなる環境、ソフトウェアとしての環境がある。伝統的には、農業をはじめとする第一次産業が生活を支えていて、生活環境を構成する住宅や神社仏閣、街の構造は、人々の生活様式と密接に結びついていた。稲作を中心とする日本の生活は、明治維新から産業化を進めるなかで西洋風に変わり始めたと考えられるが、1950年代にはじまるの経済成長の中で著しい変貌をとげた。

伝統的な生活環境は和辻哲郎のいう風土²⁾そのものである。水田と茅葺の農家によって代表される日本の農村風景は、日本の自然と人間による自然への働きかけが作り出したものである。逆に日本人の性格や生活様式はそのような相互作用のなかで生まれ出てきた。日本の自然のなかで稲作農業を行なうとき、用水がひかれ水田が開墾されて、農家の生活様式が生まれた。そのような生活環境のなかで労働するとき日本人が形成された。茅葺の民家には土間と畳の部屋があり、土間では農作業も行なわれた。民家の外周は障子と雨戸で仕切られ、内部の畳の間はふすまで仕切られていた。部屋から部屋への移動はふすまを開けていくことから、部屋の独立性は低く、家族の中での個人という考え方は弱かった。逆に個人という考え方が弱いからこのような民家を造っていたともいえる。親戚や地域社会は世間を構成していて、世間に顔向けのならないことは家族からも許されなかった。

1947年に日本国憲法が施行され、民法が改正されて家制度が廃止された。それによって、その後の経済の高度化、都市化の流れが円滑に受け入れられ、農業を基盤とする伝統社会から高度な産業社会の形成に向かった。大都市近郊ではスプロール現象とよばれた無秩序な住宅地の広がりがみられ、地方から都会へ向かった人々が住まいを構えた。この時代には家制度は人間性を束縛し、人間を疎外するものだと主張が広く行なわれた。人々は郊外の自宅から遠距離の通勤で都心の勤務先に通い、勤務先における帰属意識が「家」への帰属意識を代替して、わが社が「うち」で相手先の会社は「お宅」になったと言われている。会社が共同体となって、「うち」のために一所懸命に働けば、共同体の一員としての地位が確立し、繁栄が手に入るものと思いついてきた。

90年代になって景気が後退し人員整理の対象になってみると、勤務先は「うち」ではないことに気付かされた。しかし自宅のあるところに地域社会はなく、もともと自分の属していたかもしれない「家」もないという状況にある。伝統社会では家と地域社会が生活環境を構成し、その

なかで子供が育ち、文化を継承していた。いまや大都市近郊の給与生活者の生活環境を考えると、文化を継承するという生活環境のメディア性が著しく弱まっているのではないかと危惧される。

現代住宅は建物の密閉性が高まっているとともに、内部の空間も個室にわけられて密室性が大きくなっている。これは、子供の自立を促すために子供部屋が必要だとの教育論を背景にしている。ほとんど付き合いのない隣近所に浮かぶ孤島のような住宅に核家族が住み、家族のそれぞれも個室をもって、孤独であることを理想としているかのようである。家のなかにはさまざまなメディアが流れ込む装置が完備されているが、人間の人間らしさを、社会に生きる人間を涵養するための装置としては適当ではない。

このようなことから子供の遊びに注意が払われるようになった。冒険広場³⁾とよばれる公園がつくられ、子供が群れて泥んこになり、草を取ったり、昆虫をいじめたり、魚をすくったりできるような生活環境の重要性が言われている。遊びを体験するなかで学習や発見、自覚、訓練があり、人間関係の喜怒哀楽のなかに知情意のあらゆる側面が健全に育つものだとすれば、問題は一軒一軒の住宅を安全で快適にするだけでは解決できない。ハードウェアとして地域計画のなかで公園や緑地、河川敷などの環境を整備することが必要であるし、ソフトウェアとしてクラブ活動などを地域でまた山や海で時間のゆとりを持って行なうプログラムの実施が要請される。もちろん保育園や幼稚園は、生活環境を豊かにするための舞台装置であって、子供達の自発的なあそびが行なわれるような自然さこそそこに求められる。

文化の継承という点では、人口構造の変化も大きな影響を及ぼしている。少子化高齢化とともに婚姻年齢が高まっていることに見られるように、世代ごとの人口が減少し、世代の交代が間延びしてきている。地域から子ども達の群れが消えるとともに、子ども達の遊びや手伝いの多様性も少なくなっている。年長の子が乳児を背負って遊んでいる姿を近所で見なくなって久しい。そのため出産を控えた母親が乳児を抱いた経験が無くて不安だということになる。これは子育て文化が途切れる可能性、育て方が分からなくなる可能性を示している。逆に、高齢者のグループホームが現れて地域の介護が注目されているように、地域の新しい生活環境、老人介護の考え方が生れてきている。核家族が高齢化して高齢者だけの世帯から独居老人になるだけが唯一の道ではない。文化の継承という変化への対応を見失っているように聞こえるかもしれないが、伝統的な文化の基盤が無ければ新しい生活環境を健全なものにすることができないのではないか。

メディアとしての生活環境が、家庭生活や地域生活の知恵を伝えるものだとすれば、住宅や街の構造をどのように考えたらいいのか、地域の人びとのつながりを回復する仕掛けはどうか、意識的に取り組む時代に入っている。

4. おわりに

生活環境とメディアというふたつの言葉をめぐって簡単な分析を試みた。デジタル技術の急速な発展が衰えることを知らないあいだ、生活環境におけるメディアの多様性と重要性は高まっ

ている。したがって、生活環境を豊かにするためにメディアを活用する研究開発を活発に行うことが期待される。生活環境のメディア性についても社会学的な調査研究が、現代社会の急速な変化を理解し、社会の安定や安全を確保する対策をとるために要請される。

生活環境情報学科の教育は、生活環境を安全で快適なものにするための人材養成をめざしている。そのため情報技術や人間工学、住宅学、社会科学、地域環境などの基礎的な知識や技術を修得するように教育課程が組まれている。生活環境に関する資格はハードウェアとしての生活環境を作る技術に偏っているが、学生が就職する場面のことを考えるとそこに教育の重点がきていることも当然である。しかし、生活環境のあとひとつの側面は人間が作り出す生活環境であるところの地域社会である。それへの理解も教育には欠かすことのできない要素である。

参考文献

- 1) 村井 純 『インターネット』(岩波新書, 1995)
- 2) 和辻哲郎 『風土 - 人間学的考察 - 』(岩波文庫, 1979)
- 3) 門脇厚司 『子どもの社会力』(岩波新書, 1999)